

## 千葉数夫という同人作家——川端康成旧蔵雑誌から——

能 地 克 宜

一 はじめに——日本近代文学館所蔵川端康成旧蔵書・雑誌について

日本近代文学館に川端康成の旧蔵書・雑誌が寄贈されたことが、宇治土公三津子「館収蔵文庫・コレクション（38） 川端康成文庫」『日本近代文学館』第一一三号、一九九〇年一月）に記されている。

図書・雑誌は生前二度にわけて寄贈された。四十四年九月には、出版社鎌倉文庫の本と生活社の叢書を中心にいただいた。このとき寄贈された図書にはすべて表題紙に、同一の「川端蔵書」印が捺されている。雑誌類も鎌倉文庫発行の「人間」「婦人文庫」「社会」「ヨーロッパ」「文芸往来」を軸に、「近代生活」「文芸首都」「浪漫古典」など、戦前戦中のものを受贈した。

二度目は四十五年十二月、著書と蔵書の中から選ばせていただいて、受贈した。

これらの図書・雑誌の寄贈に加え、さらに戦後発行の雑誌も追加で寄贈されており、あわせて二〇〇〇冊ほどの川端旧蔵書・雑誌が、駒場本館と成田分館に所蔵されている<sup>1)</sup>。二〇二二年度の調査は、これらの図書・雑誌が記載された手書きのカード目録をもとにリスト化していくことから始め、これまでに図書八

四冊、雑誌三二七冊の調査を行った。

旧蔵書八四冊については、右記引用箇所記載の通り、鎌倉文庫（五六冊）及び生活社の「日本叢書」（一二冊）をはじめ、『日本現代詩大系』（河出書房、一九五〇年九月〜一九五一年一〇月）全十巻その他であった。「川端蔵書」が捺印されているのは、全八四冊のうち五八冊であるが、これらのうち一冊<sup>2</sup>を除いて見返しに「日本近代文学館」「川端康成氏寄贈」の押印、さらに「日本近代文学館」「著者寄贈」を加えた計四点の押印が確認できるものもある。これら旧蔵書はいずれも、書き込み等は一切なく、中には小口が裁断されていない状態のまま所蔵されているものもあり、旧蔵書そのものには川端の読書の痕跡が明確に残されているというわけではない。

旧蔵雑誌についてはカード目録に記載されたものが合計三四六誌ある。そのうち調査済みの一三三誌、計三二七冊のうち、「川端蔵書」の捺印は二三冊と旧蔵書に比べて蔵書印が捺印されたものは少ない。また、「川端」印が押印された雑誌が七冊あるが、いずれも旧蔵書と同様に「日本近代文学館」「川端康成氏寄贈」の二点あるいは、「日本近代文学館」「著者寄贈」を加えた四点の押印が主に奥付部分に確認できる。旧蔵雑誌もまた、書き込みはほとんど見られないのだが、それらの中から川端が目を通した痕跡を若干ではあるが窺うことができる。

まず、自作が掲載された誌面への書き込みが一冊のみ確認できた。既に石川偉子によって全集未収録作

品として紹介された「浅草・水族館」<sup>3</sup>のうち、『Casino』第二次創刊号（一九三二年六月）に掲載された「望月美恵子」の末尾に二カ所書き込みがなされている。

その踊のやうに乱れ叩く木琴のやうなところもあるのだらうが、大晦日に皆がそばを食べた時は、ただ一人はにかんでゐた。それは黒い固い果実が一つぽとりと落ちて、黙りこくつたやうな感じであった。この黒い果実、春~~十~~<sup>三</sup>月に洗はれて、新しい花形めく肌申になつて来た。彼女はまこと五月らしい踊子なり。

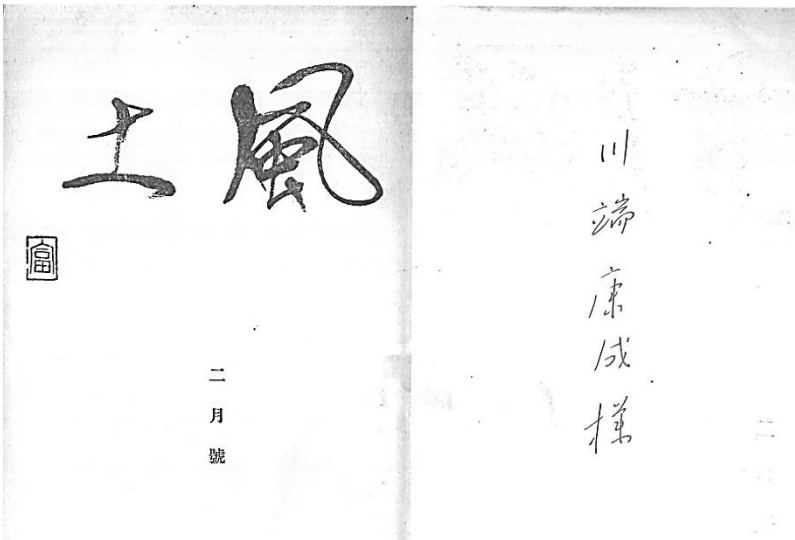
「二月」から「三月」へ、「肌白」から「肌」へといずれも軽微な訂正であるが、この全集未収録の随筆に書き込みがあるという点で、何らかの形で刊行予定であつた可能性も考えられる。

次に、川端の著作が掲載された旧蔵雑誌には該当部分の切り抜きがいくつか確認できる。例えば、「思想と生活と小説」〔『文芸時代』一卷二号、一九二四年十一月〕、「四月諸雑誌創作評」〔『文芸時代』二卷五号、一九二五年五月〕、「五月諸雑誌創作評」〔『文芸時代』二卷六号、一九二五年六月〕、「死顔の出来事」〔『金星』一九二五年四月〕、「選者言」〔『女性線』一卷五号（一九四六年九月）などがある。これらはいずれも全三五巻補巻二巻の新潮社版全集に収録されている。特に「四月諸雑誌創作評」及び「五月諸雑誌創作評」については、『川端康成全集第三十巻』（新潮社、一九八二年六月）の「解題」において「著者の手許に遺されてゐる発表誌からの切抜」を参照して本文が作成されたと記されているように、旧蔵雑誌の切り抜

き箇所が別途保存されており、それらを全集本文作成において参照したものもあることがわかる。

総じて、今年度調査を行った川端康成旧蔵書・雑誌は書き込みがほとんど確認できないのだが、『風土』一卷二号（一九三八年二月）に掲載された千葉数夫「樵人」という小説には、書き込み箇所が全編にわたってなされている。また、見返しには【1】のように川端康成への署名が記されており、この書き込みが千葉数夫の自筆訂正の可能性が考えられる。

千葉数夫及び雑誌『風土』は『日本近代文学大事典』<sup>4</sup>ほか各種の文学事典で立項されていない。本稿は、千葉数夫とはどのような作家なのか、川端康成とどのような接点を持っていたのか、書き込み箇所の特徴はどのようなものなのかについての調査内容の一端を報告していきたい。



【1】『風土』一卷二号（一九三八年二月）

## 二 千葉数夫とは誰か

まずは、「樵人」掲載の『風土』一卷二号の奥付に記載された以下の一七名の同人から確認することにした。石河穰治・一瀬直行・井上立士・二反長半・千葉数夫・大久保操・吉川由貴夫・多胡隆・田中令三・辻村もと子・中井正文・夏目孝・山川草・近藤弘文・秋山正香・東一郎・四宮学。周知の通り、一瀬直行と二反長半はそれぞれ川端に師事していたが、千葉数夫が川端に師事していたという指摘はこれまでなされていらない。また、一瀬や二反長から千葉数夫との関係を示した資料も確認できていない。また、一瀬、二反長、千葉を除く一四名の同人のうち、人名として『日本近代文学大事典』に立項された井上立士、秋山正香の項目を見ると、いずれも早稲田大学中退、雑誌『星座』（一九三五年四月〜一九三七年九月）の同人であつたことがわかる。

次に、『星座』同人周辺から千葉数夫の情報を探ることにした。紅野敏郎は『星座』の「解題」（DVD-ROM版『精選近代文芸雑誌集 総目次』、雄松堂書店、二〇一一年）において、「創刊号の裏表紙左下に記された同人の名は、秋山正香・城野旗衛・篠崎博・石川達三・与儀正昌・井上立士・北原武夫・中村梧一郎・平川虎臣・馬場桝太郎・山口武・田中令三・酒井龍輔の13名。」と記している。また、紅野は『日

本近代文学大事典』において『星座』には「石川譲治、辻村もと子、さらに秋山正香、山本和夫、一瀬直行、平川虎臣らも参加」と記している。発行期間は異なるが、『風土』同人と『星座』同人の一部は重なっていたことがわかる。だが、『星座』同人の中に千葉数夫を確認することはできず、また、前掲『精選近代文芸雑誌集 総目次』において『星座』の執筆者を検索しても千葉数夫の名前は出てこない。しかし、『星座』同人の一人であった、石川達三が、後年になって千葉数夫に言及していた。石川は「心に残る人々(5)」『文学界』二二巻五号、一九六八年五月)において、以下のように記している。

千葉数夫というペンネームの文学青年がいた。或る時期私とおなじ同人雑誌の仲間でもあった。ひとひねり捻ったような男で、ひとひねり捻ったような綺麗な小説を書いていた。産れは千葉県大網から少しはいつた福岡村依古島の中農の長男で、農家の跡を継ぐべき者がどう間違つてか作家を志し、駿河台の西村伊作がやっていた文化学院の学生になった。

石川達三と同じ同人雑誌の仲間だったということは確かなようであるが、『星座』の総目次に名前を確認することができなかったのは、千葉数夫がペンネームであったためというわけではない。『風土』同人の一人であった四宮学(筆名、宮林太郎)が、石川達三没後に発表した「達三と医者——石川達三の死の枕辺で」『すばる』七巻六号、一九八五年六月)において、次のように指摘している。

ぼくは石川達三と五十二年間つきあってきた。はじめは文学青年として、達三がブラジルから帰っ

てきた直後、中村梧一郎、秋葉和夫、中山義秀、秋山正香、千葉数夫らと一緒に「新早稲田文学」という同人雑誌をはじめたのである。

この記述に基づけば、千葉数夫は石川達三とともに『新早稲田文学』（一九三〇年一〇月〜一九三二年二月）に携わっていたということになる。しかし、前掲『精選近代文芸雑誌集 総目次』においても千葉数夫の名を「解題」及び「総目次」から確認することができなかった。だが、千葉と石川との交流はその後も続いていた。石川は前掲「心に残る人々（5）」末尾を次のように結んでいる。

千葉数夫はそれから父の後を継いで農家を経営しながら、戦中戦後にかけてずいぶん苦勞をした。五十過ぎるまでは時おり思い出したように小説を書いていたが、生活事情もあつて続けて行かれなかった。途中から私と縁つづきになったので、一家の事情は解つていたし、彼の悲願もわかつていたが、結局同人雑誌の古顔ということで終った。いまではもう息子が一家の働き手になり、いくらか心の閑も出来たらしいが、改めて原稿を書こうと言っても、齒車が錆びついて廻らなくなっているのではないかと思う。

昭和十六年の春、私をはじめて自分の家を建てた時、彼は近処から庭木を集めてトラック一台分送る手配をしてくれた。その木は二十五年を経て大きくなり、今も私の家の庭に蔭を造っている。その木の生長を見、それが季節季節の花をつけるたびに、千葉数夫を思い出す。

一昨年、同じ千葉県に住んでいた私の弟が病死した時には、ずいぶん彼に世話をかけた。二人とも明治三十九年うまれの丙午である。

若い頃に石川達三と交流を持ち、やがて文学から離れ家業を継ぐようになっていった千葉数夫の姿をここから確認できる。

石川との関係は明らかになったが、川端とはどのような関わりを持っていたのだろうか。前掲「心に残る人々（5）」には次のような一節も書き記されていた。

そのころ文化学院には作家十一谷義三郎氏が先生になっていた。或るとき千葉数夫は教室で十一谷氏と言ひ争ひ、かなりしつこく喰ひ下つたものらしく、先生は腹を立てて、（君みたいなやつはこんな学校へ来ることはない、やめてしまえ）と言つた。千葉は自分で退学届を出しておいて、（先生が言つた通り学校をやめました、これから後はどうしたらいいんですか）と言つた。十一谷氏は困つて、（では僕のうちに、ときどき来給え）と答えた。

そういう次第で彼は十一谷義三郎の弟子になり、ときどき作品を持って行つて指導を受けていた。千葉数夫が文化学院に通つていたということ、十一谷義三郎の弟子であつたことから、川端との関係について探つてみたい。十一谷義三郎が「聘せられて文化学院の英語英文学の主任」となつたのは一九二四年であつた<sup>5</sup>。川端もまた、文化学院の講師を務めていた。「私が一時、文化学院文学部の講師をつとめた



のは、私の師の菊池寛氏が文学部長として迎へられた縁による。昭和五（一九三〇年）、私が三十一歳のことであった」<sup>6</sup>。その後川端は一九三四年三月まで講師を務めていた。この期間に千葉数夫が文化学院に在学していたら、川端に創作を学んでいた可能性があるのだが、千葉が文化学院に入学したのは一九二五年であった。川端や十一谷と同じく文化学院の教壇に立っていた三宅幾三郎は、一九三七年四月二日に逝去した十一谷義三郎について言及する際に、千葉数夫について以下のように触れている。

終りに、十一谷君の最後まで最も忠実なるお弟子、秋山数夫君について書いておき度い。秋山君は本科第一回生で中途退学した人だから、文化学院にも知己は多からうと思ふ。同君が最後まで十一谷君に尽されたことは非常なもので、親身もおよばないといふ言葉は、全く同君のためにつくられたのかと思はれる位であった。秋山君もえらいが、これ程のお弟子を持つてゐた十一谷君もえらかったなあとしみじみ思ふ。<sup>7</sup>

ここから千葉数夫の本名が秋山数夫であることがわかる<sup>8</sup>。川端旧蔵雑誌『風土』は一卷二号と、三卷三号（一九四〇年六月）の二冊のみであるが、後に『風土』創刊号（一九三八年一月）を確認したところ、千葉数夫は本名の秋山数夫で「十一谷義三郎先生に寄す」を発表していたことがわかった。三宅幾三郎は、「最後まで十一谷君に尽された」と記しているが、秋山数夫は十一谷没後も「夫人と遺児」のために、「二ヶ月に近い整理の時日を過ごし」、一九三七年一月には、「夫人とともに連日……十数日（古くもない靴

の表はこれで破れた）、数百軒、逗子葉山一帯に余すところなかった、哀しく辛かりし、家探がし」を行っていたことが記されている。千葉数夫が十一谷義三郎の弟子、秋山数夫であるということに着目するならば、十一谷義三郎と川端康成との関係、そして、十一谷と最も深い関わりのあった豊島與志雄と川端との関係から、川端と千葉数夫（秋山数夫）の接点が見えてくるようになる。

### 三 千葉数夫と川端康成との接点

十一谷の死の報せを受けた当日のことを川端は以下のように記している。

四月二日、西班牙墨西哥の舞姫クキタ・ブランコの第一夜を観て、鎌倉に帰ると、十一谷君がなくなつたと電話の報せがあつたといふ。（中略）夜半過ぎに鎌倉を出たので、葉山の分先きの寂しい漁村のやうな大楠町秋谷では、起きてる家が一軒もなく、こんなところで独り死ぬ法はないとさへ思はれるのだつた。

小高い丘の上の十一谷君の家に着くと、納棺がすんだところであつた。豊島與志雄や二三の人が見えてゐた。<sup>9</sup>

おそらく「二三の人」の中の一人が千葉数夫（秋山数夫）であると思われる。川端も前年に見舞いに訪

れたことを「十一谷君が病氣だとは聞いてゐたし、「朝日新聞」の「花より外に」も中絶したけれども、さほどのこととは思はなかつたので、去年の七月十五日、気軽に見舞に行つた。逗子の町は夏祭りだつた。

ところが、十一谷君に会つてみると、私は一目で死の影を強く感じた。」<sup>10</sup>と記しており、川端の著作に千葉数夫（秋山数夫）の名は記されていないが、晩年の十一谷の身の回りの世話をしていた千葉数夫（秋山数夫）の存在は認識していたはずである。

一方、豊島與志雄は、十一谷が亡くなる前年の様子について次のように記している。

一人の兄と二人の弟とのために可なりの金を負担し、更に好日書院のために可なりの金を負担し、そして一昨年の母堂病死、昨年弟の病死、その後に自身の病氣なので、療養も意の如くならなかつた。

それ故、私たち——川端康成君や三宅幾三郎君や菅忠雄君や秋山数夫君など、いろいろな心配して、文壇の知人関係から見舞金を集めようとはかつたのであるが、十一谷君はそれを耳にすると、あくまでも

固辞し反対した。<sup>11</sup>

ここには、自身と川端、そして秋山数夫らを「私たち」と一括りにして捉えており、豊島は十一谷の弟子としての秋山数夫の存在を十分に認識していることがわかる。

それでは、千葉数夫（秋山数夫）は川端に対してどのように接していたのであるか。前掲「十一谷義三郎先生に寄す」には、十一谷の「夫人と遺児」を「夫人の実家からの迎ひの令妹御主人の手に委ねた」日

の夜に豊島與志雄が小宴を開いたことが記されている。その翌日、「私は亡師の上も憶うてやみがたい胸中を豊島氏に書き送つてわづかに自らを慰めた。帰宅後は同じ気もちを（秋谷）滞在中御好意を戴いた鎌倉の――両三度の知より得てゐない川端氏にも林氏にも礼状を添へて洩らさざるを得なかつたほどである。」と記している。ここから、千葉教夫（秋山教夫）が川端と面識のあつたことがわかる。

十一谷義三郎が亡くなる前年、川端は十一谷を訪れた。一九三六年一〇月三日の『読売新聞』に掲載された「十一谷のために」には、その時の様子が記されている。

逗子に病む十一谷義三郎を豊島與志雄、川端康成、菅忠雄の三人が見舞ひ、レントゲン写真などを撮つて療養をすゝめたのは夏の終り頃のことであつたが後事を心配せず療養專一に恢復を待つことが第一と、最近この三人が主となつて義三郎の旧稿を整理し、新たに出版を計画するなど具体案を考究中だと云ふが病友を慰める三人の友情、よき果を結ぶことを祈つて止まない。

この計画は十一谷没後に、全集または選集刊計画として、引き続き豊島と川端の間で検討されていくことになる。

亡くなつた十一谷義三郎のために全集を出そうといふプランがあり、まだプランだけであるが豊島、川端のコンビで実現を期してゐる。遺稿としては僅かに令弟のことを書いたものと断想と合せて七枚ばかりに過ぎず病中に考へてゐたらしい自伝的なものに筆を染めなかつたのは心残りである。

この計画は「十一谷君の文壇的交友といへば、長年兄弟のやうにしてゐた豊島氏」<sup>13</sup>と川端が指摘するように、豊島の方が積極的に動いていたことが、川端宛の豊島の書簡から窺える。特に、昭和十二年六月十九日附の書簡には千葉数夫の本名、「秋山数夫」の名が記されている。

他に用件ですが、十一谷君の「唐人お吉」につき、日活から四百円くれました。未亡人の方へ送る手筈です。

尚、全集もしくは選集の件、創元社で如何でせうか。御話してみて頂けますまいか。こちらだめなら、竹村か第一書房かとも考へますが、御考慮願ひます。編纂者は、川端、横光、三宅、豊島、あたりだらうと考へられます、岸田君はだいぶ縁遠く頼みにくいやうです。実際事務は、秋山正香、秋山数夫の両君が当つてくれます。

六月十九日

豊島與志雄

川端康成様<sup>14</sup>

結局、十一谷義三郎の選集刊行は実現しなかった。しかし、その刊行計画の過程がこの書簡に記されたことによつて、「秋山数夫」の名を『川端康成全集』において確認することができた。千葉数夫（秋山数夫）と川端との接点は十一谷義三郎の死を介して見いだすことができるのだ。

#### 四 「樵人」の特徴・書き込みについて

千葉数夫「樵人」とはどのような小説なのか。また、書き込みの特徴とはどのようなものなのか。「1」から「3」の三章で構成された「樵人」の冒頭「1」は以下のように始まる。

それまで一方に眼を奪はれてゐた三人の男は同時に頭をあげた。ぽかりと丘の向かふに現れた一人の男の姿が草の枯れた丘を越え畦道を越え、しだいに大きくなつてきて見たこともない髭の深い面をそこへひよこりと現したと思ふと、樅の樹の下からかう声をかけたからだ。

「おはやうござえます。みなさん！ ご苦労なことで……！」

ところがかう声をかけられた三人の男は振り返りもしなかつた。ちよつと眼を反らしたと思ふとすぐまた一方に眼を奪はれてしまつた。もつともなことだ。小舎の前には一頭の大きな獣があつて藻掻いてゐた。それは一見四十貫からあることのわかる太つた逸物であつた。耳の孔から毛の一本一本までくしやくしやに揉んで、汚れなくし、奇妙なことにでかい図体の全身から露にすめつてすとりと濡れて清められてはゐるけれど、奇怪な一種の強烈な臭ひを發してゐたことだ。見ると恐ろしく宙に眼を引き据えてゐるのである。一方の前蹠の爪を地に突き立て、他の前蹠をむなしく空に動かしてゐた。筵の上に腰をおろしてゐる三人の男と、なかば倒れなかば起き上がったまま、かうして藻掻いてゐる

雌豚とのあひだには、肥え桶や肥え柄杓が投げ捨てられてあつた。地面は爪で引つ掻き廻され鼻面で非〔穿〕たれた狼藉の跡をしるしてゐた。さうしてその上を薄黄色にちめつた反流動物が振り撒かれてゐた。

「1」冒頭の「三人の男」とは、区長の源助、源助と親子三代にわたつて「犬猿の仲」である区長代理の傭太郎、「気軽な、剽軽者、痩せつぼち」の博労の松二郎である。養豚業を営む源助の牝豚の一匹が、当時発生した豚コレラと「同じやうな症状」に罹つていた。傭太郎は「コレラにちげえねえ」と即断するが、松二郎はその牝豚の産んだ仔豚一匹を譲り受けることを条件に治療することを申し出た。源助は承諾し松二郎に治療させ、次第に回復していくまでが「1」に描かれている。この牝豚は、右の引用箇所のように、「大きな獣」「太つた逸物」「奇怪な一種の強烈な臭いを発してゐた」「藻掻いてゐる牝豚」というように、徐々にその牝豚が病んだ状態にあることが明らかとなつていくように表現されている。また、引用箇所第一段落に登場する「一人の男」は、この後「1」ではほとんど登場しない。しかし、その場にずっと佇んでおり、源助の牝豚回復の兆しを見せる「1」の末尾で「三人の男」に語りかける。

一人の男が古島の部落はづれをどこからやつてきて、樫の樹の下まで辿りついたのは、まさにかう意味の深い「いふ」ときだつたのである。

「古島のどおどといふのは、どちらさんで？」

「どおどといふのは、馬のことだぜ？」

剽軽者松二郎がかういつて、あの特徴のある鼻の頭と、特徴のある尖った細長い顔を振り向けたとき、彼らの背後に負うて居る、見知らぬ男の越えてきた向かふには、柔らかい小草むらの円みを越えて、朝まだき青い空の一めんを、赤みを帯びた紫紺の縞の輝きがいく筋が走り騒がして居た。歩みの遅い冬の太陽がのぼりかけようとするところであつた。男たちは笑ひ出した。さうして山陰が同時に振り返つて、この朝の部落の、最初の訪問者の見すばらしい姿を見やつた。

~~念ふべき朝の訪問者である見知らぬ男を、部落のものは木いあひだ心にぞめて忘れなかつた。~~

ここで「1」が終わり、「2」の冒頭は「大男のどおどは見知らぬ男をつれて部落を出たが、もちろん、その持ちものや身なりから見知らぬ男の生業しごふは見わけることができなかった。」と書き出される。「1」末尾で松太郎が「どうど」は「馬のこと」だと語られるが、「2」冒頭では「どうど」は「大男」であつた。「顔に髭があるのではなく髭の中に顔があるといったあんばいで、ちやうど馬うまのそれに似てゐた」ため、「部落」の人々から「馬」と呼ばれている欣四郎という名の人物だ。「一人の男」とは「二年間の暮れ、谷沢の山うちで落ち合つた仲であつた」。「山うち」とは、「冬期伐採した山林の黒松を薪にして漁をする浜へ向かつて積みだす」「百姓」にとつての「季節的な副業」だという。だが、「一人の男」は「百姓」ではなく、この後「木挽き男」と呼ばれていき、「2」ではこの「木挽き男」の来歴が語られていく。



「3」は「1」の結末から「ちやうど〔1〕百日目となつた日」の源助の家が放火される様が描かれる。そして、この「木挽き男」が「見知らぬ浮浪人」として再び登場し、源助によって放火の犯人に仕立て上げられるが、備太郎の「わしが通つたとき、悪戯してたのは、子供たちだつた！」という証言によって、「木挽き男」は連行した警官から「突つ放」される。そして、「3」の末尾は以下の一節で閉じられる。「部落のものはそれきり、この見知らぬ、木挽き男の話しをきかなかつた。さうして知つた。」〔1〕区長をつとめたことのある「吝<sup>しは</sup>ん坊源助」の名を一代に負うた、いまは死んだその男が、滑稽なその約束を果たしたといふこともつひに記憶にはなかつた~~し~~。」「その約束」とは松二郎に仔豚を譲る約束のことで、村の中心に位置する区長を務めた源助の名声が失墜し、外部からやつてきた「木挽き男」の身の上に焦点が当てられるが、「木挽き男」もまた村の中心から遠ざかつていく。「樵人」は叙述の方法や表現形式、構成などに特徴が窺え、石川達三が指摘したように、「ひとひねり捻つたような綺麗な小説」だと言える。

だが、「樵人」引用箇所を示しておいたように、書き込み前の記述はやや冗長な表現が多く、決して洗練されたものであるとはいえない。書き込み訂正箇所の多くは、そうした冗長な表現の削除や、読点の挿入、指示語や接続表現の省略がなされている。また、以下の【2】や【3】のように、語り手の顕在性を削除している点も書き込み部分で特徴的なものとなっている。

すめものである。

どおどが濱野の直之丞の家へゆきつくまで、この木挽き男からききた話は、凡そつぎのやうなものである。讀者作  
者ともにしばらく、彼の半生を語る、木挽き男のあはれに逞しい物語りに心を鎮めよ。

「ふん、……開墾地の山で樹を挽いてるうちに體を臺なしにしちまつたのだてー 無一挺もつて出たつきり、十三年間も、てめえの生まれ故郷へは足も向けやしねえのだてー！ みんな呉れてやつちまつたのだてー！ このおれさまがなー ぶん、……向けやしね、……向けるもんかい……」

そのとしの秋であつた。山では伐採がはじまつた。

木挽き男はいまは山木挽きの仲間に身をおとした。山木挽きの仕事といふものは自由を憧れる人間の本来的仕事とも思はれない。人間の掟がないかばりに、そこには、自然の掟と束縛がある。闘ひがあつた。人間同志のそのやちに眼に死なると、心に感ずることもできない。氣づかぬまにそれは厳しくしのびやかに、忍び寄つてくる。

一ぶくつけ、一ばい飲ることのほかは、まだ星の散らばつてゐる頃の起き抜けから晩げまで、仕事だ。仕事だ。なんのことはない。夜だ、晝だ、月だ、——と語り手はいふのだが、山の外の世界に木枯らしが吹きはじめると、山の中も風音となり、まもなく雪となつた。鍋だ、土釜だ、水だ、まつ暗闇だ、——と語り手は酔つた眼を据ゑて古い自分の過ぎこしてきた生活を呪ふのであつた。かうして、峰や谷間をわたる風音とともに、頭上では、斧と鋸の進行につれ、山の枝葉がまばらになつていつたのである。

(親の代にあこれでも、村の役をつとめたこともある自作百姓だつた、奉公人の一人も使つたこともあるだてな！ へへ

さて、木挽き男の身の上話しに、ながながと道草を食ひやうと手間まつたが、――讀者諸君はいま、そのご區長の源助と源助の牝豚と十匹の兒豚がどうなつたかを（サレヤウ）知りたいてあらう。あれからもうだいぶんの月日がたつた。一と月目には牝豚はその小舎へ牝豚を迎へ入れませられた。十頭の兒豚は揃つてそのまゝ天ぶらに掲げて中へ入れせしまひたいやうな澤のある（サ）棕色の柔らかない肉に太りだした。二頭は小舎へおいて育て、あとの八頭で六十圓の金高を上げたことは誰でも知つてゐるまゝだ。

ちやうど百日目となつた日、源助は入り口の柱にちやんと、交合の日をしるしておいた。牝豚はふたたび靉い、いまにも乳汁の出さうな膨れた乳房を曳き摺つてゐた。その尻のあたりは出産の目出たくも間近いことを知らせてゐた。

源助のかみさんは毎日槽に餌をはこぶのであつた。何頭の兒豚が這入つてゐるかを確かめようと、源助はまた毎日小舎の前に立つて眺め暮らすのであつた。

「一匹が十両になるたあ、えらい世の中になつたもんだ。」

4 彼は、獨りごとをいふのであつた。

「一匹が十両になるたあ、……ふんまつたく、……この時節がもつとつづけあええて！」

「ああ、戦争はもつとつづきますかね。××××××××××××減つてくたに？」

太つた色の悪いかみさんは、腹を前へ突きだすやうに、亭主の懐えたやもな小さい顔を見た。

【2】【3】いずれも、作中で唐突に語り手が読者に語りかけていた部分の記述の削除が試みられている。【2】ではそれが完全になされているが、【3】では読者への直接の呼びかけは削除されたが、「そのご区長の源助と源助の牝豚の十四匹の児豚がどうなったかを話さう」というように、まだ十分にはなされていない。「樵人」の書き込みがどのような意図のもとで行われて川端の手元に届いたのかについては明らかにすることができなかったが、書き込みによって、唐突な表現も抑制され、小説としての完成度が高まっていることは指摘できる。

## 五 おわりに——千葉数夫の評価

本稿は日本近代文学館所蔵の川端康成旧蔵雑誌の中で、全編にわたって書き込みがなされていた唯一の小説、千葉数夫「樵人」に着目し、千葉数夫とはどのような人物なのか、川端とはどのような関係があったのか、「樵人」とはどのような小説であり、書き込み箇所にはどのような特徴があるのかについて、調査内容の一端を報告してきた。最後に、千葉数夫が同時代の文壇において、どのように評価されてきたのかについて言及しておきたい。

今回の調査で確認できた、「樵人」と同年代に発表された短編小説は、他に二作あった。「生魚場」〔『知

性』二巻九号、一九三九年九月）と「繭と牛」（『風土』三巻四号、一九四〇年九月）である。「生魚場」は戦争で若い働き手が不足した港町を舞台に、千代と菊という二人の若い女性が漁師として生活するさまが描かれており、菊は子供を生んでこの港で生きて行くことを決断し、千代は東京へ出て「女中」として働くことを選択する。二人の女性の対照的な人生が描き分けられている。この「生魚場」は川端康成が編者の一人であった、『日本小説代表作全集 4』（小山書店、一九四〇年六月）巻末の「昭和十四年度下半期主要雑誌掲載小説目録」に掲載されている。

「繭と牛」は年配の百姓である正一と弥四郎が乾繭を携え市場へと赴くが、彼らの望む価格で取引することができず、苦しい生活を送っていく。貧しい農村に生きる人々の生の一端が描かれている。この「繭と牛」は川端康成が審査員の一人を務めた第二回「文藝推薦」作品募集（一九四〇年五月〜九月の同人雑誌掲載作品）応募作品である。しかし、川端は病気のため審査を欠席した。審査当日の様子が青野季吉・宇野浩二・武田麟太郎「第二回『文藝推薦』審査」（『文藝』八巻一二号、一九四〇年一二月）に掲載されている。青野と宇野は、以下のように「繭と牛」を酷評している。

宇野 「風土」の『繭と牛』は？

青野 こいつは浅いよ。

宇野 浅すぎるね。

確かに、「樵人」と比べて内容的にも表現的にも稚拙な箇所が散見される。また、宇野浩二は、『文藝推薦』審査後記「『文藝』八卷一二号、一九四〇年十二月」において、「繭と牛」は最後まで読んだが、候補作すべてに目を通していないと述べ、「欠点といへば、『田舎医者』、『和釜と応挙』、『繭と牛』などは、欠点が少ないかも知れないけど」と前置きをしているが、どのような点で「浅すぎる」のかについての言及はなされていない。このように、千葉数夫の戦前の小説は、ほとんど評価されずに半ば黙殺されてきたといえる。

だが、戦後になって、千葉の小説は漸く具体的な記述を伴った評価がなされるようになっていた。同人雑誌『風土』は一九五五年九月に復刊第一号を発行した。復刊第一号に名を連ねた同人は二十八名いるが、そのうち、戦前の『風土』からの同人は、一瀬直行、秋山正香、秋山数夫、四宮学の四名であった。千葉は再び本名で同人に名を連ねている。佐々木基一は「同人雑誌評」(『文学界』一〇巻一号、一九五六年一月)において「『風土』とか『文芸復興』とかいう雑誌が復刊されて、それぞれ手堅い作品がのつているが、それは手堅いというだけで、実をいうと、私の興味をさほど惹かなかつた。」と記していた。しかし、復刊第二号に掲載された小説に対してはかなりの誌面を割いて言及している。そして、『風土』復刊第二号(一九五五年十二月)巻頭に秋山数夫の名で発表した「霞と海」について、以下のように評じている。

とにかく、同人雑誌にあらわれた傾向は、実に千差万別であつて、二三回読んで結論を出すことなど、

とてもできる相談でないことがわかった。ただ、全体として、なんとなく新味に乏しい。新味というのは、たんにハイカラぶった作風をさして云うのではない。作者の生きかた、考え方、作風が、どれほど深く現代にかかわっているかと云う意味である。

そういう点からみて、今月いちばん面白く読んだのは、秋山数夫「霞と海」（『風土』復刊二号）であつた。九十九里浜の実弾射撃演習基地を舞台に、成上り者のボスや貧しい無知な漁民が登場し、土の香のする色恋ざたをそれにくらませている。説明不足のところ、描写の不十分なところをまだたくさん残しているが、これはともかく小説だ。基地の風物描写と人物が互に溶けあつて、一つの効果にまで高まつている。目はしのきく漁民東平と阿呆の甚太、甚太のもとの女房で今日ボスの細君になっている雪代の三人も、会話を通して性格が生きている。基地を扱った作品はほかにも多いが、これほど文体の雰囲気の中かで事件を描いたものはない。わたしは、ふと、スタインベックやフォークナーなどの地方主義文学を連想した。砂漠のように白けきつた砂丘基地の索漠たる空気、それが風景や事件や人々の心を一様に包んでいる。そこには、基地と漁村の香りのようなものがただよっている。この効果の集中は新しい方法ではないかと思う。

15

「霞と海」を発表したのは四十七歳の時であつた。石川達三が指摘した「五十過ぎるまで」あとわずかとなるが、漸く文壇で注目されるようになったのである。「霞と海」以降の作品及び、千葉数夫（秋山数夫）

文学の全貌については、今後の調査の過程で明らかにしていきたいと思うが、今年度の調査の過程では、「霞と海」が千葉数夫（秋山数夫）文学の一つの到達点であると指摘することができる。

（本稿末尾に今年度の調査で明らかとなった千葉数夫（秋山数夫）の著作一覧を掲げておく。）

## 注

<sup>1</sup> 一九六〇（昭和四四）・一九六一年に日本近代文学館に寄贈された図書・雑誌及び追加で寄贈された雑誌のリストは、現在公開されていない。これらの詳細については、次年度以降の『年報』にて報告したいと考えている。

<sup>2</sup> 徳田秋聲『一つの好み』（鎌倉文庫、一九四六年六月）は、川端寄贈書としてカード目録に記載されているが、「川端蔵書」印も「川端康成寄贈」の押印もない。見返しには「日本近代文学館」印及び「39.8.13」と川端旧蔵書が寄贈された年とは異なる寄贈年月日が押印されているため川端旧蔵書ではない可能性も考えられる。

<sup>3</sup> 石川偉子「川端康成新資料について——「今日の扉」「浅草日記」および全集未収録作品一覧——」（川端康成学会編『川端文学への視界』28、銀の鈴社、二〇一三年六月）、「〈新資料〉『川端康成全集』未収録文——「谷崎潤一郎集」を読む」「映画入門」、他二篇（『芸術至上主義文芸』39、二〇一三年一月）。



4 『日本近代文学大事典』全六卷（講談社、一九七七年一月〜一九七八年三月）、本稿では増補改訂デジ  
タル版（二〇二二年五月一〇日公開）を参照した。

5 十一谷義三郎「年譜」（『現代日本文学全集 第六十一篇 新興芸術派文学集』改造社、一九三一年四月）

6 川端康成「自由の心と美」（『愛と叛逆―文化学院の五十年―』、文化学院出版部、一九七一年五月）

7 三宅幾太郎「十一谷義三郎君を憶ふ」（『愛と叛逆―文化学院の五十年―』（文化学院出版部、一九七一年  
五月、初出は『文化学院同窓会誌』六号、一九三七年十二月）

8 「秋山数夫」で『新早稲田文学』、『星座』の総目次を検索しても該当記事は確認できない。

9 川端康成「十一谷義三郎」（『中央公論』第五十二年五号、一九三七年五月）

10 9と同じ

11 豊島與志雄「十一谷義三郎を語る」（『改造』一九卷七号、一九三七年五月）

12 「十一谷の全集計画」（『読売新聞』一九三七年四月二〇日）

13 9と同じ

14 『川端康成全集補卷二』（新潮社、一九八四・五）

15 佐々木基「同人雑誌評」（『文学界』一〇卷三号、一九五年三月）

【参考】千葉数夫（秋山数夫）著作一覧〔暫定版〕

著者名	作品名	初出	ジャンル
秋山数夫	十一谷義三郎先生に寄す	『風土』 一卷一号、一九三八年一月	随筆
千葉数夫	樵人	『風土』 一卷二号、一九三八年二月	小説
千葉数夫	馬鹿の岩蔵兄弟（第三回）	『風土』 二巻六号、一九三九年六月	小説
千葉数夫	生魚場	『知性』 二巻九号、一九三九年九月	小説
千葉数夫	繭と牛	『風土』 三巻四号、一九四〇年九月	小説
千葉数夫	石河穰治の一面	『風土』 四巻一号、一九四一年四月	随筆
千葉数夫	文学は生きることの覚悟	『文芸新潮』 一卷一号、一九四二年三月	アンケート
千葉数夫	米食ふすべての日本人に	『文芸新潮』 一卷三号、一九四二年五月	アンケート
千葉数夫	農業水利調整準備委員記	『文芸新潮』 一卷五号、一九四二年七月	評論
秋山数夫	霞と海	『風土』 復刊第二号、一九五五年十二月	小説